葛名稱

の處へ此實なると云傳ふ、日本にて種てもはゆるなり、近來渡る、博愛心鑒に有りと云、

〔鹽尻七十一〕落花生ハ藤蔓莖葉、一遍豆に似たり、其花落地、一果土中結、其味甘美常に異なり、人珍貴とす、東垣食物本草三に見ゆ、山藥と同類なるよしなれば、元より毒なく補虛の物にて侍ると覺へ侍る、是豆の類なり、

地錦抄に、其植やうなんど委しく記せり、煎りても蒸してもよし、此頃唐土よりも多く來り、亦我國にても種まきて實をとる、

〔本朝世事談綺二生植〕落花生

元祿のすへにわたる、典籍便覽に云、藤の蔓莖扁豆に似て、花開地に落、一花地に就て一菓を結ぶ、大さ桃のごとし、深秋取、味甘美也、人甚美賞す、

〔草木育種下果〕落花生典籍便覽　香芋花鏡とも云、和名とうまめ、又長崎にてなんきんまめといふ、紀伊國にて多作、野土黑ぼくに砂まぢりの山畑にて、陽地へ植べし、冬中畑へ灰人糞をまぜ耕置、別に代を拵、落花生の莢を割て、豆ばかり淺く植、葉を生じて畑へ移べし、相應の地なれば、畑へ直に蒔付てよし、植たる圍へ籾糠を切まぜ墾たるがよし、葉の間より根を下し、土中に入て莢を結ゆへ、土ハ柔なるがよし、十月根廻を遠ほりて採べし、水にてよく洗、二日程乾、紙袋に入て、風のあたる所へさげ置、炒て食し、又挽て粉にして、餅などにかけ食へバ香く味よし、脾胃を補効あり、

〔桃源遺事下〕西山公〇德川光圀むかしゟ禽獸草木の類までも日本になきものをば、唐土より御取寄被成、又日本の中にても其國に有て此國になきものをバ、其國ゟ此國へ御うつしなされ候、覺し召末に記す、草之類〇中略落花生、

〔本草和名八草〕葛根一名葛穀蘇敬注是卽實耳云、一名鷄齊根、一名鹿藿、一名黃斤、一名葛脰、蘇敬注云、根入土五六寸者也、脰頸也、仁諸音三、〇三恐豆誤黃葛根一名廡羅出養性要集一名圈、一名播赤赤字無攷已上出雜要訣和名久須乃禰、